

---

## 【三題噺】星は還る

うるる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【三題噺】星は還る

### 【Nコード】

N1322W

### 【作者名】

うるる

### 【あらすじ】

「文学少女」シリーズより三題噺

お題は【夏の大三三角形】【墓場】【うなぎ】

夏のある日、夏の大三三角形から落ちてきた星の子のお話

お題【夏の大三角形】 【墓場】 【うなぎ】

これは僕らが出会ったひと夏の物語。

お盆休み。僕ら家族はみなでお墓参りに出掛けた。

先祖の顔がどんなのかは知らないが、お盆休みという風習に沿って行くことにしただけだ。

けれど、僕はその年のお墓参りに行った事を決して後悔はしなかった。

それは後になっても先になっても。

夕方近くに墓場にやってきて、先祖のお墓に手を合わせていたのだが、

ふと黙祷から目を開くと、横のちよつとした暗闇に一点の光を見つけたのだ。

近づいてみると、そこにいたのは一人の女の子。

しゃがんでいて顔は見えなかったが、どこにでも居そうな中学生ぐらいの女の子に見えた。

だが、明らかに違うところは身体から光を発していることだ。

身体に懐中電灯を忍ばせているとかそんな問題ではない。

だって全身が光っていたのだから。眩くも無い、仄かな光を。

明らかに不審ではあるが、別にそんな事に構わず僕は

「君どうしたの？ 迷子？」

と聞いてみた。すると女の子はこちらを向いた。無垢で可愛い顔の女の子。

「うん。わたし、お家に帰りたいの。」

そう。泣きそうな顔をしていたので、この子を何としても家に届

けたいなと思った。

「お家はどこら辺分かる？」

すると女の子はその質問に対して、上空を指差した。

「夏の大三角形から落っこちてきたの。」

「えっ？」

それが僕と星の子の出会いだった。

あの年の夏は不安定な天気が続き、満天の夏の星空を見る事が難しかった。

星の子は自分の体力も蓄え、満点の星空が出たあかつきに帰れる事を話してくれた。

なので、それまでは僕ら家族で星の子を預ける事にした。

最初は家族もただの迷子の女の子だろうと思っていたのだが、女の子の身体から発する光を見て、信じられない事も無いという顔していたぐらいだろうか。

それ以上は何も言う事無く、家族の一員のように迎えてくれた。僕にとっても妹が出来たみたいで、何だかとても嬉しかった。

そして、星の子と過ごす毎日はとても楽しかった。

星の子は星の子で自分の周りの星座がどんな性格をしているのかを話してくれた。

「白鳥座さんって姿はエレガントなんだけど、性格はとーっても意地悪なの！」

なんて、星座の裏話が聞けるなんて、思ってもいなかった事だったのでとても面白かった。

代わりに僕はこの世界の事を話した。

特に星の子にとっては食事も始めての経験だったので、食事を教えたあの日の夜はとても楽しかったし、

その日が土用のうなぎの日だったので、あの日のうなぎは格別に美味しかった。

しかし、出会いがあれば別れもある。  
そう、別れの時

その日は満点の星空に恵まれていた。

星の子はその夜に丁寧な家族や僕に最後の挨拶をした。

帰る準備は整いました。わたしはあの夏の大三角形の元に帰ります。

と。

あまりにも突然なのに、挨拶が丁寧だったので、僕はその時は何も  
感じなかったし、感じられなかった。

しかし星の子が地面に立って、その足が空に向かって宙に浮き始め  
た時、

僕の頭には星の子と過ごした日々が走馬灯の如く流れ、感情を抑え  
きれなくなっていた。

「なあ…もう帰っちゃうのかよ…!？」

「はい。ごめんなさい。」

僕の目からは無常にも涙が零れ落ちる。

ああ…別れる時は涙なんか流さないぞと決心してたのに。

「でも、わたしはあなたと過ごした日々を絶対忘れません。」

また、あの日に食べたうなぎっていうのをもう一度食べたいな。」

星の子のその言葉ひとつひとつに、僕の涙一粒一粒が流れる。

「ああ、ここに来たらまたいつでも食べさせてあげるよ!!」

だからさ、また迷子になってここに来いよ!」

「はい…またいつか…来れたら…」

と星の子は言葉を残し、夏の大三角形へと消えていった。

僕の手元にはあの女の子が最後に一粒だけ流した涙の結晶がある。

やっぱり不思議な子だったけど、僕はあの子と過ごした夏を一生忘  
れない。

と僕は夏の大自然を見ながら、  
ゆっくりとうなぎを頬張っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1322w/>

---

【三題噺】星は還る

2011年10月4日22時16分発行